2024年3月 17日 久宝教会 受難節第5主日礼拝メッセージ

「もちろん、不安はあるけれど」　　牛田匡牧師

聖書　ヨハネによる福音書 12章20−36節

年度末の 3 月も、慌ただしい毎日を過ごしているうちに、早くも後半となりました。2 月の半ばから迎えていた「レント（受難節）」も、第 5 週目となり、いよいよ来週からは最後の受難週となり、2 週間後には「イースター（復活祭）」となります。そのような暦を毎年繰り返していると、受難も復活も毎年恒例の当たり前のことのように思えてしまうかもしれませんが、今から約 2000 年前にイエス様が実際に経験された「受難」というのは、決して当たり前ではない、大変な苦難だったのだろうと想像します。今回の聖書のお話も、そのような苦難を前にして揺れ動くイエス様の心情を伝えています。

舞台は前回から引き続き、過越しのお祭りのために大勢の人たちでにぎわっていたエルサレムの町でした。エルサレムの町にはユダヤ人以外の異邦人たちもたくさんいましたが、そのお祭りの観光、見物をするために何人かのギリシア人たちも来ていたようです。そしてその中の人たちが「イエス様に会いたい」と言って、ギリシア語の分かるフィリポに声をかけ、フィリポとアンデレが、その人たちをイエス様に紹介したと書かれていました。このことから分かるのは、当時のイエス様の活動、ガリラヤの様々な村々を歩き回り、世の中の片隅に追いやられている人たちの所へ行き、声をかけ、その手をとり、救いや解放を告げ知らせ、共に食事をして回った、というその活動が、ユダヤ人の中だけではなく、異邦人たちの耳にも、噂となって広がっていたということです。確かに、当時の世の中で常識とされていたことや、律法に記されているとして、権力者たちによって定められ従わされていたことに対して、時に真正面から抵抗するイエス様の言葉と振る舞いは、ユダヤ人社会の中でも賛否両論を呼び起こしていましたから、それらが噂となって異邦人たちの耳にも届いていたというのは当然考えられることでした。

ここでフィリポに声をかけ、イエス様と会って話をしたギリシア人たちというのが、どのような人たちだったのか、詳しいことは何も分かりません。けれどもイエス様はその人たちを前に、今の自分自身が置かれている状況について、改めて語られました。いよいよ「人の子が栄光を受ける時が来た」とある 24 節の言葉です。聖書を読む私たちは、これが十字架に架けられるという受難と、その後の復活のことだ

と、既に知っているので、そのように理解しますが、2000 年前のイエス様自身は、実際にはこれから自分の身に何が起こり、どのように事が運んでいくのかということは、分からなかったはずです。しかし、漠然とした不安は確かにあったことだろうと思われます。24 節の有名な言葉、「一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」は、イエス様が自信たっぷりに弟子たちや、周りに来ていた人たちに対して、語り教えた言葉というよりは、むしろこれから先に何が起こるか分からない自分自身を励ますために口にした言葉として理解する方がふさわしいのではないかと思います。「これから先、仮に命を落とすことになっても、それは無駄死にではない。そこから多くの実が結ばれ、新しい命がたくさん芽吹いて行くはずだ」。そのような言葉で、不安におびえる自分自身を励ましていたのではないでしょうか。いや、鼓舞せずにはいられないほどの不安があったのではないかと思います。

続く 25 節の言葉、「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む者は、それを保って永遠の命に至る」は、福音書の中に何度も登場する言葉ですが、それだけ言われても、何だかよく分からないような気がします。そもそも「自分の命を愛するな、憎め」と言われても、一体何をどうしたらよいのでしょうか。極論すれば「この世の命は大したことない」ということなのか、とすら訝しんでしまいますが、もちろんそんな事ではありません。むしろ「自分自身に執着する者は、自分を滅ぼし、この世にからめ取られた自分自身を憎む者は、永遠の命に向けて自分を守り通すのだ」（本田哲郎訳）ということ。この世の価値基準によってがんじがらめにされてしまっている自分、生きづらくされている今の自分に執着し続けることから解放されて、命本来の在り方に立ち返っていくこと、そこにこそ本当の解放、救い、永遠の命がある、ということなのではないかと思います。

27 節ではより明確に「今、私は心騒ぐ。何と言おうか。『父よ、私をこの時から救ってください』と言おうか」というイエス様の飾らない言葉が述べられています。「心騒ぐ」、心が落ち着かないとは、要するに「不安でたまらない。助けてください」ということです。しかし、その一方では「私はまさにこの時のために来たのだ」と自身の使命感についても言及されています。どちらのイエス様が本物でしょうか。その両方、不安と使命感のどちらもの間で揺れ動くイエス様の姿こそ、私たち人間の本当の姿なのだろうと思います。もしもイエス様が、神の子、スーパーマンとして、何の恐れもなく、不安を感じることもなく、雄々しく受難への道を歩まれたのだとし

たら、同じように出来ない私たち、ついつい不安を覚えずにはいられない私たちは、イエス様の後ろに従って歩む者として、それこそ落第生になってしまいます。けれどもイエス様は違いました。クリスマスに神が人間となったというのは、私たちと同じ弱さも足りなさもそっくりそのまま持っている、限界を持っている人間になったということです。ですから、イエス様も一人の人間として、確かに不安におびえ、おののいていましたわけです。

その後、27－28 節では、イエス様の祈りに応えて、天からの声が聞こえたとあります。しかし、ある人たちの耳には「雷が鳴った」と聞こえ、またある人たちの耳には「天使が話しかけた」と聞こえました。このことから分かるのは、天の声、神様からの語りかけというものは、全ての人に対して一様ではないこと、逆から言えば聴く側によって、聴こえ方も異なっているということでしょう。ヘブライ語聖書の中に記されている数々の物語では、神様と人とが、親しく会話をする様子が描かれている（創世記）一方で、雲の中や火の中から超自然現象のようにして語ったり（出エジプト記）、さらには「沈黙（しじま）の声」で語ったり（列王記上 19：12）しています。「沈黙の声」というのは矛盾しているということで、新共同訳でも聖書協会共同訳でも「かすかにささやく声」と翻訳されていますが、実際にはむしろヘブライ語の原文通りに「神様の声は、沈黙を通して語られる」と素直に読む方が、私たちの祈りに対して期待通りの返答をしてくれず、沈黙ばかりしている神様（＝沈黙をもって返答している神様）という私たちの生活実感としてもうなずけるのではないかと思います。

「十字架と復活」という出来事を既に知っている私たちは、イエス様自身が全てを知った上で、恐れることなく十字架への道を進まれ、そして十字架の上でも神への信頼を失うことなく、雄々しく立派に死んでいったという勝手な思い込みや期待感をもって、この受難物語を読んでしまいがちですが、実際はもちろん違いました。この後、着々と十字架の受難への道を歩まれるイエス様は、一人の人間として、自身の使命に対する熱い思いは常に抱きながらも、その道すがら常に迷い、恐れ、そして祈っていました。イエス様は、自分が命を狙われていて、命を落とすことになるかもしれないということを、恐らく自覚していたことと思いますが、自ら殺されよう、命を捨てようとは思っていなかったはずです。そして、弟子たちに「私に従って来なさい」（26）と言っていたからには、共に同じ道を歩もう、共に生きようとされていたに違いなかったのだと思います。また「光のあるうちに、光の中を歩みなさい」

（35－36）という言葉も、今はまだ光があるということ。全てが闇に閉ざされてしまっているわけではないということ。光と共に歩むことができるからこそ、「歩みなさい」と言われているのだと理解することができるのではないでしょうか。

さて聖書に記されている受難物語から 2000 年を経た現在の世界は、光のある世界でしょうか。今もなお社会には様々な問題や課題があふれ、人と人とが互いに傷つけ合い、命を奪い合う戦争が続けられています。そのように絶望しそうになることがあっても、それでも世界は暗闇に閉ざされ切ってしまうことはありません。全てが絶望に終わってしまうことはありません。必ずそこにも光があります。なぜなら、十字架の先には復活があるからです。もちろん、だからと言って、この現実世界の中から、一切の恐れや不安がなくなるわけではありません。ですが、不安はあるけれども、光である神様が常に共にいてくださる、いつまでも共におられるからこそ、私たちは今日これからも、日々に与えられている道に、神様に支えられながら、励まされ力付けられながら、歩みを進めて参ります。